



河川生態学術研究会を 振り返って

第3代委員長 小倉紀雄

研究会との関わりと多摩川研究グループ発足のとき

私は東京農工大学へ赴任以来、多摩川およびその支川での物質循環について地球化学的な視点から調査研究を行っていた。1995年の初めに大島康行先生（早稲田大学名誉教授）から多摩川で河川生態に関する総合的な研究を行いたいのので、早急に研究内容とメンバーを考えて欲しいとの要望があった。そこで生態学の専門家の協力を得ながら多摩川の生態学的な総合研究を行うことを決意した。

1995年11月に筑波の土木研究所で第1回研究会を立ち上げ、参加メンバーの想いを語ってもらった。メンバーの想いはさまざまであったが、結論として多摩川の共同研究を上流域の永田地区で行う計画をまとめることができた。

1996年4月に生態学、河川工学などの権威である大島先生、川那部先生、山岸先生、和田先生などが参加した研究会（現在の河川生態学術研究会）で、多摩川の研究計画を提案した。さまざまなコメントがあったが、否定的なものではなく、多摩川研究グループの発足が認められた。

1996年5月8日～10日に研究グループ全員が参加する合同調査を永田地区で行った。同じサイト、同じ時期にさまざまな専門分野のメンバーが一同に会し調査を行い、成果を共有し課題を探ることにした。この合同調査には研究会のメンバーだけでなく大学院生、学生も参加し、24時間体制の大規模な合同調査になった。

このような合同調査を1996年10月にも実施し、

成果報告会を行った。このようなことなどを繰り返して、多摩川研究グループの考え方と体制ができあがった。

合同調査や結果報告会には大学院生など若手が多く参加し、河川に関心をもつ研究者の育成に貢献できたと思う。

研究会第3代委員長在任のとき

私は2006年から2009年まで、河川生態学術研究会の第3代委員長として研究会（第22回～第27回委員会）の運営に関わった。

この間、研究は図1のような目的で6河川と河川総合研究グループで行われた（図2）。

研究会はすでに20回以上開催されており、体制はほぼできあがっていたが、研究体制の見直しと整備が行われた。

大きな課題として、一つの研究グループがいつまで（何年間）研究できるのかという議論が行われた。その結果、研究グループをAグループ（研究を実施）とBグループ（Aグループ後の関連研究）および河川総合研究グループに整理・見直しが行われた。また運営委員会を設置し、研究実施上の企画調整を行い、必要に応じて評価部会を設置することになった。

委員長退任後も個別の河川として、揖斐川、木曾川、菊池川で研究が実施されており、研究会が発展し、河川研究に関わる若手研究者が増加していることは大変喜ばしいことである。

【目的の相互関係】

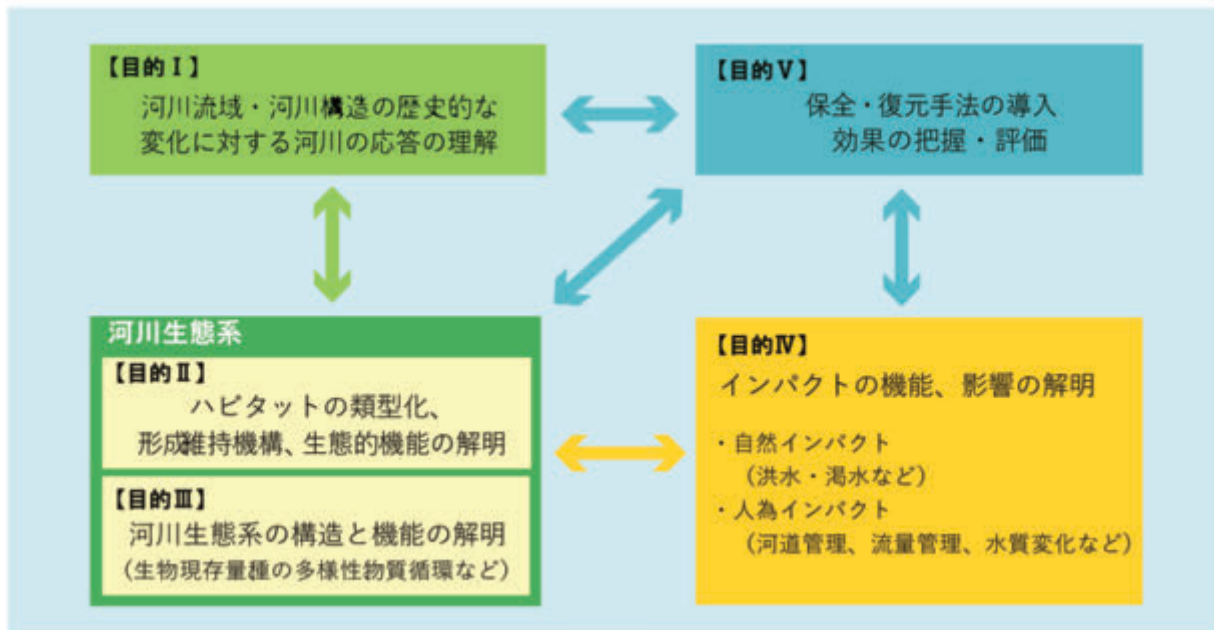


図1 研究会の目的と相互関係

【実施体制】

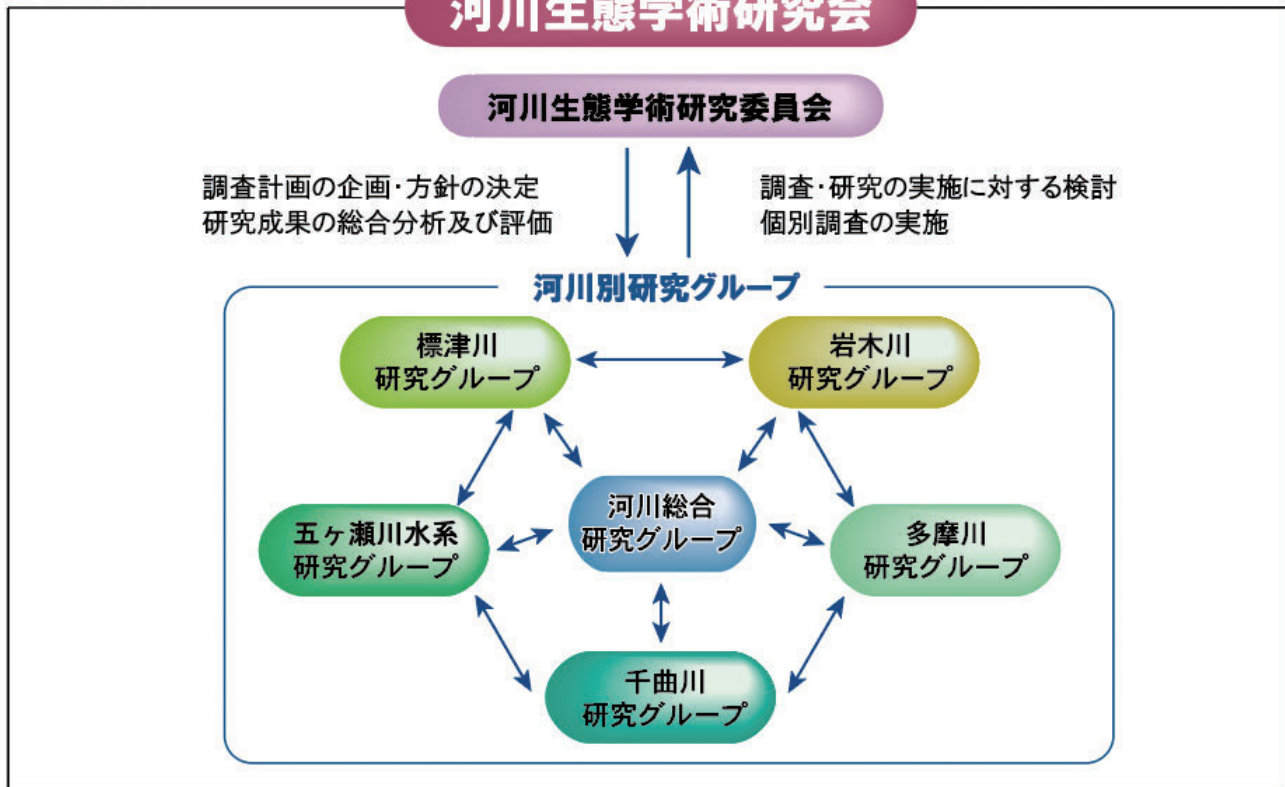


図2 実施体制